

お墓、あなたは無言の師匠

金 采映 (キム チェヨン)

似ているようで似ていない、似てないけれど似ているような韓国と日本……。

日本に来てもう5年半、今はこの国の生活にも少しずつ慣れて、当たり前というか気楽に感じるようになりましたが、日本にきた当初は、様々なところで言語や文化そして習慣の違いを感じて、何故？ 何で？ と絶えず疑問を抱えながら過ごしていました。いつの間にかそれらの謎を解きながらの時間が、何故か段々と楽しみに変わってきました。その中の一つを紹介させていただきます。

日本に住み始めた頃、私達人間が生活している空間の中に死者の空間があることに、つまり生きている者と死者とが平気に共存している不思議な風景に正直違和感を覚え、皮肉的で少なからず驚きました。

それは、私たちが住んでいる家の近くに、しかも最寄り駅周辺の人通りが多い処に共同墓地があるのは勿論、電車に乗ってよく行き来するところや車窓から見える風景にも墓地があって、まるで、墓地に囲まれて生活をしているような気がして、凄く嫌でした。そして、東京という大都会に行った時でも、都会の中心部にお墓があって、「あっ？」と訝しく思った記憶もあります。いずれにしても、墓地のすぐ隣の家に住んでいる人々は毎日怖くないかしら、見る度ごとに心配で可哀想だと思いました。韓国人にとって、墓地は死者の処で、恐怖感と嫌悪感を感じさせるところですので、毎日生き生きと生活している空間に死の象徴である墓地があるのは、やはり気分的にも情緒的にも拒否感を感じてしまいます。

韓国では、昔から儒教の影響で、人が死んだら火葬をせずに山に埋葬（土葬）する墓地を造る文化が残っており、全国の山が墓地だらけでもう飽和状態になっていて、ちゃんと管理していない墓地も沢山あって美観上よくない為、政府側も色々新しい墓地文化を提案して努力している最中で、段々納骨堂文化が広がっています。しかし、まだまだほとんどの人々は自分が住んでいる居住地の近くに納骨堂の建物を建てるのを嫌がって強く反発する為、町の外れか田舎など住宅街から遠く離れた処に建てられるのが現実です。

此所までは家の外側のお話でしたが、一步、日本人の家の中に入ると仏壇が置いているのをよく見かけます。私の主人の実家にも伯父さんの家にも畳の部屋にご先祖の位牌を祭った大きな仏壇が置いてあり、季節のお花や果物を供えていたり、持って行ったお土産もま

っ先にお仏壇の前にお供えしてお線香を焚いて拝むのです。そこに住んでいる人にとっては、まるで毎日死者と向かい合っ共々に食事をしたり寝たりして、きっと死者の存在を感じているのでしょう！そのころの私にとっては考えるだけでも、怖くて嫌でした。

韓国では“ゲトンバッテに転んでもこの世がいい”という諺があります。これは“死んでの長者より生きての貧乏。”と同じ意味です。何故韓国人はこれほど生に執着して死を怖がったり、死をタブー視し、死に対する考えさえ回避するのでしょうか？ これもやはり、来世観のない現世志向的な儒教の影響が韓国人の潜在意識の中に流れているのではないかと思います。

もう一つ面白いことは、韓国で生死観と言うのを、日本では死生観と言っていることです。どこかで死生観と書かれているのを初めて見たとき、間違っ書かれていると思っ、辞書を調べたことがありました。この事から、韓国と日本が死に対する観点が全然違っと思っました。死を生の前に置くこの言語習慣、そして死者の空間を、生きてる人間の空間の側に置く文化の違いから、死に対する日本人の心構えを伺い知ることが出来ます。

近年、韓国では、**well-being** と共に **well-dying** という言葉をよく聞きますが、直訳すると **well-being** が幸せな暮らしなら、**well-dying** は幸せな死という意味でしょう。肉体的、精神的に健康で幸せに生きていながら幸せな死にそなえていくことで、**well-being** と **well-dying** は繋がっています。つまり、死と生が別々に離れているのではなく、生の中に死があること、これは、まさに村上春樹の小説『ノルウェイの森』（韓国語版『喪失の時代』）の中で“死は生の対極としてではなく、その一部として存在している”と言っているのと一脈相通ずるものがあります。

しかしながら、毎日墓地の際を通るうちに、知らず知らずフェンスの隙間から墓地の中を覗いてみるようになりました。墓地の入り口には、いつも可愛らしい赤いよだれかけを掛けたお地蔵さんたちの前でお辞儀をしている人々が、また日差しが良い日にはいつも誰かのお墓の上でのんびりと昼寝をしている野良猫ちゃんや花束を携えてご先祖様にご供養しているおばあちゃんたちなど。死のような静止画面のイメージの世界だった墓地の中にも、動画のように色んな動きがありました。いつの間にか、日常的になったこの風景にだんだん情を移すようになりました。

現在、二人の子供を産み育てる母になった私、夜泣きに何回も起きておっぱいをあげることでいつも寝不足だったこと、熱がでたり怪我をしたとき胸がはり裂けるような痛みを感じながら病院へ連れて行ったこと、自分が病気で倒れても子供の事がもっと心配で、じっ

としておれなかったこと等色々ありましたが、全然苦と思わず可愛い顔を見ることだけで、幸せを感じています。親になってから、やっと親の気持ちが分かるようになり、親に対する切ない思いや感謝の気持ちで一杯です。

さらに、私と我が子が存在する根本がついにご先祖様のお蔭だと理を悟るに至って、ふつふつと感謝の気持ちが自然に湧いてきました。昔は、〈親、ご先祖様のご恩って当たり前〉と、頭では思いながらも、心奥は何も感じていなかったのかもわかりません。それが今は、積極的に子供を連れて一緒にお墓参りをしたり、実家に行くと仏壇の前で手を合わせることなどを大切にしています。

子供たちも幼い頃からこのような姿を見て育てられると、自然に親とご先祖様を大切に思うようになり、感謝の気持ちがそなわるようになるでしょう。このような習慣が結局家族の絆を深めることに繋がっていくと思います。日本みたいに家の近くにご先祖様のお墓があると、好きだった亡き人にふと会いたい時は花束を持って散策がてら軽い気持ちでいつでもお参りが出来るから、むしろ良いかと思っています。

お墓の近くに住んで、お墓の横を通りながら、お墓はいつも私に死を考えさせます。私にとって **well-dying**、幸せな死とは何か？ について、自問自答しています。幸せな死とは残された家族や友人たちに良い思い出を沢山残してあげることだという結論に辿り着きました。生きている今という時間を、わたしと関わりがある全ての人たちとご一緒に、心温かい絵を描いて生きたいと思います。

有り難う！ もう怖くないよ！

いつまでもそちらにおられて、無言で私に叫んでくださいね！